広村安政の海嘯実況

「これは、ただ事ではない。」
とつぶやきながら五兵衛は家から出て来た。今の地震は別に烈しいという程のものではなかった。しかし、ゆったりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りとは、老いた五兵衛に今まで経験したことのない不気味なものであった。

これはかつて国定教科書小学国語読本巻十に掲載されていた「稲むらの火」という教材の書き出しである。

安政元年11月5日（1854年12月24日）夕刻から広村を襲う大津波があった。この津波がいわゆる安政元年の大海嘯で、24日午後4時近畿地方を揺るがせた大地震（安政南海地震M 8.4）によって起こったものである。

この物語のもとは、この海嘯から村人を救うために活躍した、当時の広村豪族浜口家7代儀兵衛翁の話である。その時翁は35歳であった。

今、その大海嘯の実況について、広川町誌により訪ねてみることにしよう。

安政元年の夏ごろより誰言うとなく、本年は大津波がくるという流言が盛んであった。果たして12月23日4ツ時（午前10時）強震が起こった。その地震の激しいことから、大津波がくることを案じて、村人は何れも手回りの大切なものを抱えて、ことごとく八幡山やそのほかの台地など安全な所に逃げて、2、30人の強壮な者が村内を警戒していた。

そして翌24日は、朝から風もなく波が穏やかで日光は朦朧として花曇りの空のようであった。

それで、前日立ち退いた老幼のものも、安堵の思いでそれぞれの家に帰ったのであった。

午後になって、村内の井戸水が何れも非常に減少するという声があり、また刈藻島の方あたりに一抱えもあるような火柱が立ったのを見たというものもあらわれた。

果たして、同日7ツ時（午後4時）の日没近きころ大震動があって、その激しいことは前日の比ではなく、瓦が飛び、壁は倒れ、塵煙もうもうとして空を覆うのみならず、これと共に、ごうごうとして遠雷のごとく、いんいんとして巨砲の連発するがごとき響きがおこったのである。

しかし、潮勢はまだなんら異変がない。ただ北西の天が特に暗黒の色をおび、陰々粛殺の気が天地を圧している気配である。これは、ただ事ならずと見た浜口儀兵衛翁は、壮者を励まして、村人を速く何れか安全な地に立ち退かせるように尽力したのであった。が、この時早く、すでに山のごとき怒濤は陸上に押し寄せてきて、付近一帯は見る見る泥海と化しさった。

怒濤は早くも民家を襲い、激浪はすでに数町の川上まで遡り、民家の崩れ流れる音すさまじく、潮勢に押し流される人あり、流材に身をよせ命を全うするものもあり、全く悲惨そのものであった。

かくして、日は何時しか暮れて真の闇となった。逃げ遅れる者のないように、儀兵衛翁は壮者を促して松明に火を点じ、別に田の畔に積んであった稲むらに火を放ちて、暗夜に道を失える多数の避難者の危急を救ったのであった。

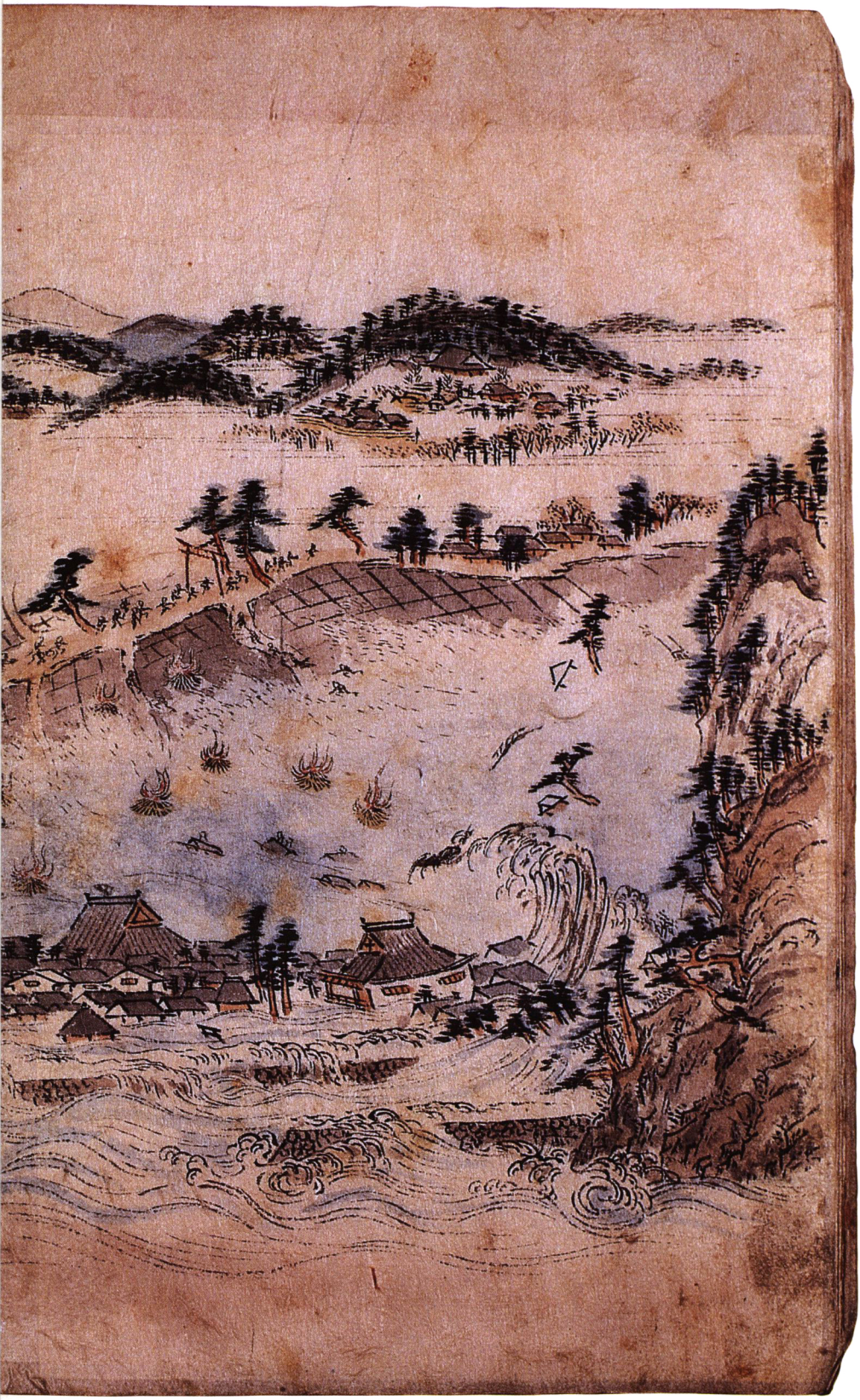
大津波の押し寄せること前後7回、そのなかの5番波が最も激しかったという。

吉田咏処の筆による安政の海嘯図は、この様を模写したものである。図の中央に10か所余の稲むらの火の手が上がっており、避難者は点々として八幡神社の台地を指して駈けている。画面の左方が広川でその上手に舟がうちあげられている。右手の山陰には江上川がある。水柱の揚がっているあたりがそれである。

この津波によって広村は復興不可能ではないかと思われるほどの大被害を被った。儀兵衛翁は、その後の村人の救済と広村が二度とこのような災害から逃れるためにと、私財をなげうって広村大堤防を築いたのである（文中7代儀兵衛翁とあるのは後の梧陵翁のことである）。

ちなみに、この海嘯による広村の被害は、次のようであった。当時の広村の戸数は 339戸、人口 1,323 人、そのうち流失家屋 125戸、全壊10戸、半壊46戸、浸水 158戸、溺死36人。

上野伊三夫／和歌山県有田郡広川町教育委員会



安政の海嘯実況／養源寺蔵